

茅コンファレンスの思い出

宮 島 英 紀

昭和 35, 6 年頃だったと思います。(何新聞かも忘れてしまいましたが) ある新聞の科学欄の囲み記事に、(多分)「私が一番興奮したとき」というテーマの連載記事がありました。ある日、茅先生が執筆され、「握り飯を持参し泊まりがけで合金の比熱を測定し、比熱のピークが現れたときに一番興奮した」という内容の記事が掲載されておりました。(当時、その意味がわかりませんでした、合金の規則不規則変態にともなう) 比熱のピークが現れるまでの息詰まるような緊迫感とピークが現れたときの高揚感を生き生きと書かれた記事がとても印象的でした。この記事を読んだとき、僕にとって「一番興奮した」ときであり、これで僕の進路が決まってしまうように思います。ですから、物理学科に進学し、茅研の後継の飯田研究室に入ることは、既定のように感じておりました。大学院入試の面接で「物理実験で何が面白かったか」と尋ねられたので「比熱の実験」と答えたら、「比熱測定のような実験の何が面白いのか」と揶揄されました。大学院へ進学後、奇しくも「茅先生が比熱を測定した」部屋で自分が実験をすることになるとは思いもしなかったことです。

東大で飯田先生、学習院大学で溝口正先生、東大物性研と慶大では近角先生のもとで勉強をさせて貰いましたから、すべて茅先生のお弟子さんにあたる先生方の下で磁性の研究ができるという幸運に恵まれました。僕から見ると茅先生は直系の祖父ということになるのでしょうか。しかし、茅コンファレンスの出席は良くありません。最初の参加は第 13 回「アモルファス物質の物性とその応用」(1975 年、高野山)、2 回目は第 16 回「鉄の物性」(1978 年、えびの高原)、その後はずっと欠席し茅基金運営委員になってから第 42 回(蔵王)、44 回(裏磐梯)、最後は信州・松代の「最近のスピン科学とスピン技術」の組織責任者となって参加した程度です。

初めて参加した第 13 回は高野山の宿坊で開かれました。宿泊は和室に相部屋です。東北大の中川康昭先生はじめ大御所の先生方と同室になり、昼夜分かたず緊張しておりました。さらに、隣室は名大・上田良二先生のグループが宿泊しており、深更になると当日の講演内容の講評をはじめます。襖一枚を隔てた和室ですから、否が応でも辛口の品評が聞こえてきます。僕は最終日にアモルファス希土類鉄合金の磁性の話をするようになっておりましたので、耳がそばだち、目は冴え、殆ど不眠状態になりました。最終日、自分の講演の前、緊張感からタバコを 3, 4 本たて続けに吸ってから壇上にたちました。夏の昼時の暑さ、会場の熱気、畳の大広間に坐る茅研出身の先生方の厳しい視線、会場の左側の椅子に端然と座られた茅先生の奥深い眼差し、汗顔の至りとはこのことでしょうか、何を話しているのかわからないまま終わってしまいました。このような緊張は空前であり、絶後の経験になると思いますが、とてもいい勉強になりました。昼食後、コンファレンスが終了した後は、脇目もふらずに南海電鉄高野線の電車

に乗り大阪へ戻りました。梅田のガード下のラーメン屋で食べたラーメンは最高。世の中にこんなに美味しいものがあつたのかと天井を見上げつつ心底から感動した。この至福のラーメンも空前絶後です。

それから星霜 22 年、最後の茅コンファレンスの企画・運営を僕がすることになりました。最初の茅コンファレンスと双対させ、テーマは初回の「磁性」に対して「最近のスピン科学とスピン技術」、場所は同じ信州の北信で野尻湖に対して松代と決めました。松代は、同年 NHK の大河ドラマ「風林火山」の主題地になった場所です。

最終回なので、茅研に因んだいろいろな世代が登壇できるよう企画しました。茅先生と同世代の方は、さすがにご出席できません。お弟子さんに当たる世代（70～80 歳代）、孫に当たる方（50～60 歳代）や曾孫（30～40 歳代）の方に講演をお願いしました。大変嬉しいことは、玄孫にあたる 20 代大学院生も大勢がポスター発表に参加されたことです。勿論、茅先生の訶咳に接し、初期・中期の茅コンファレンスをリードされてきた OB の方にも（半ば強制的に）参加をお願いしました。当日の会場には、随伴のお子さんまで含めれば歳の差が 80 歳に及ぶ方々が一同に会しました。これだけの年齢層の方々が参加するコンファレンスは、国内外でも珍しいと思います。培われた科学技術は、話題と視点を共有することによって次の世代へ縦に継承されていくものだ、ということを感じさせられた次第です。

2007 年はスピントロニクスの大興隆期であり、垂直磁気記録技術を応用した超高密度ハードディスクや巨大トンネル磁気抵抗効果を使ったヘッドの市販が開始された年でもありました。これらを踏まえた茅コンファレンスでは、話題が満ち溢れる講演と活発な質疑討論が行われました。これは、ユーイングを始祖する我が国の磁気研究が、長岡半太郎、本多光太郎、茅誠司、そしてその弟子たちによって連綿と培われてきたものであり、今なお生き生きと研究が進展していることの証左でもあります。この茅コンファレンスの詳細は別稿（固体物理 9(2007)585）をご覧ください。

茅コンファレンスは 2008 年 6 月の第 46 回のグランドフィナーレ、「21 世紀物性科学の展望」をもってひとまず幕を下ろすことになりました。大変残念です。近年、同業研究者だけが集まる単色の会議は国内外で日をおかずに開催されていますが、茅コンファレンスのように立場や世代を超えた多様で多彩な会議は衰退の限りです。社会全体が精神的な豊かさと余裕を失いつつあるせいかもしれません。しかし、「茅コンファレンスは閉幕したのではない、第一幕が終わり休憩になったただけだ、必ず第二幕が始まる」と僕は信じております。

今、僕の手元に 2 冊の本があります。「巨木・茅さん」（半澤朔一郎、中央公論事業出版）と「思い出の人 茅誠司」（茅先生遺稿・追悼文集刊行会編、朝日出版サービス）です。改めて読み直しましたが、茅先生が研究に、教育に、そして科学行政に、その卓抜した才能を発揮されたことを改めて認識させられました。茅コンファレンスは茅先生のお人柄をもって初めて可能となったものと思います。

「思い出の人 茅誠司」を開くと最初のグラビアに茅誠司書「和而不同」の写真が載っています。僕の大好きな言葉です。揮毫された年を見ると昭和 50 年 8 月、つまり僕が茅コンファレンスに初めて参加し、冷や汗をかいて講演し、そして至福のラーメンを味わった、あの月です。今思うと、あのとき無言であった茅先生から僕へのメッセージのように思えて仕方ありません。

(慶応義塾大学教授)